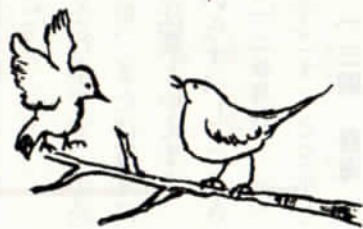


〈法話〉 人間に生まれてきてよかった

—— 仏法を聞けるいのち ——

米田 睦雄



願わくば、この南無阿弥陀仏の心が、平等に一切の人々に伝わり、同じ菩提心をおこし、もろともにみ仏となり、世を照らす灯火とならんことを

一、人生は終わったのか

「これで私の人生は、終わったのか」という思いが、空虚で真っ白になっている私の頭をよぎりました。十八年前のことです。

平成七年一月十七日の早朝、阪神淡路大震災で本

堂・庫裏など、お寺の全てが灰燼に帰した時のことです。地震直後に、近所の火事がお寺にうつり、「燃えるもの」全てが見事に焼き尽くされました。残ったものは、鉄とブロックと赤く焼けただれた瓦だけでした。日が暮れて辺りが暗くなっても、まだ、書庫の蔵書だけがなごりを惜しむかのようにな何時ま

でも燃え続けていました。

いつからそこにいたのでしょうか。本の芯まで焼け尽きてゆく書庫の前に立ちすくんでいました。

真っ赤になって燃え尽きてゆく蔵書を、なすすべもなく、ただ見つめ続けるだけで、

あまりにも突然のことで涙もでませんでした。書庫の蔵書は、学生時代から一冊ずつ三十数年にわたって収集し、大切にしてきた仏教書です。そこに私の人生が凝縮されて詰まっていたといっても過言ではありません。

ふと気づくと、「ナンマンダブ、ナンマンダブ」と、お念仏が私の口からこぼれ出ていました。「われ」にかえりました。「これで人生をつぶしていいのか」、「ふりだしに戻っただけじゃないか。もう一度立って歩こう。いつもわたしが一緒だ、離れないよ」と、阿弥陀さまに、声をかけられたように聞こえました。



二、振り出しから

もともと、裸で生まれてきたのだから、また、振り出しから始めたらい。このことを阿弥陀さまは

気づかせてくださいました。これまで縁あって私が出会い、積み立ててきたものも、縁が尽きると、全て私から去ってゆく。

しかし、阿弥陀さまだけは私を見捨てることはないし、けっして私を離さない。このことが知らされると、もう一度振り出しから始めることができました。新聞の投書欄にこんな記事がありました。

「阪神大震災の時のことです。全壊したアパートから息子を救出し、がれきから貴重品を探し出しました。冷たい六甲おろしの中、自転車で坂道を上っていました。身も心も疲れ果て、自転車を投げ出して大声で泣きたい気分でした。」

その時、ひとりのお坊様が和歌山ナンバーの軽トラックから降りてこられて、「たいへんですね。ひとりで頑張ることないんですよ。私たちがついているじゃないですか」。この言葉は、私の大切な宝物になりました。もし「頑張りなさいね」という言葉だったら、私の心はぐしゃぐしゃになっていたと思います」と。

「私たちがついているじゃないですか」は、阿弥陀さまの心ですね。人生には、山もあり谷もあります。この世は平坦な道ばかりではありません。しかし、人間はそれほど強くありません。だから「これで終わりだ」と、人生を捨ててしまいたい思いにかられることは、誰にでも起こり得ることです。

「私の人生なんてもうすべて終わりよ！」と叫びました。すると、そんな私に母は涙ぐみながら言いました。「何もかもすべて終わりということは、何もかもすべてこれから新しく始まるということでもあるでしょう」と

これは二十一歳の時、交通事故で半身麻痺の身となり、自暴自棄になっていた時のあるエッセイストとお

母さんとの会話です。阿弥陀さまの心がお母さんの言葉に表れているではありませんか。(ラジオ深夜便)

三、ハンカチと雑巾

私が今ここに居るのは、親に生んでもらったからです。私の「人生」は、自分の力でこしらえたような顔をして「自分だけの人生」だと思ひこむ。「うぬぼれたり、落ち込んだり」の繰り返しのおかげで、欲を出し、我をはり、見栄をはりながら、まわりの人に迷惑をかけていながら、それに気づくこともなく、「自分には盲点はありません」という顔をして平然と年を重ねている。自分は善人のつもりでも善人ではないのです。

「あなたは自分をハンカチのような人間と思いませんか、それとも雑巾だと思いますか」と尋ねられると、躊躇することなく「ハンカチ」を選んでしまふ。なぜなら、ハンカチはきれいですし、胸のポケットに飾られてカッコいいこともあります。拭くところも顔や手です。それに比べて雑巾は、汚い所を拭き、雑巾自身も汚れています。ハンカチは人目

につく役、雑巾は目立たない裏方です。目立たない役どころは軽く見られやすいのがこの世です。誰でもきれいな役どころでハンカチでありたいと思うのは当然の結果でしょう。

物事を判断するとき、欲の心に合うか否かが基準になっていきます。それによって「損か得か、善いか悪いか」などを比較し分別しています。判断の基準が煩惱にある以上、その結果は満足のいくものにはならず、不平不満の連続です。

四、次代につながる心

「人の身は受けがたく、仏法は聞きがたい」といわれます。人間に生まれていなかったら、仏法が聞けていない。聞けなければ、阿弥陀さまのお心に遇えていない。もしそうであったなら、挫折のなかで「残念だ、悔しい、こんなはずではなかったのに」という虚しい思いを抱えたままで、この世の別れをしなければなりませんでした。

しかし、おかげさまで、「人間に生まれてきてよかった。阿弥陀さまの呼び声に遇えてよかった。

本当の自分のすがたに遇えてよかった」ことを実感させていただけました。

他人に親切にした場合、「ありがとう」の言葉がかえってくると嬉しい。しかし、そのお礼の言葉がないと腹が立つ。「してあげなければよかった」という苦々しい感情が湧いて出る。「してあげた」の思いから離れられない自分がある。他人にいいことをしてあげて腹が立つのはおかしいですね。

自分で気づいていないだけで、「私がした」という毒がまじっていたことの証しです。なにをしても毒のまじったことしかできない私を教え、そのまま引き受けてくださる阿弥陀さまの大悲心の仏法が、次の世代に伝わらなくてもいいと思われませんか。

永代経のご縁を大事にしてゆきましょう。ご一緒に阿弥陀さまのお呼び声を聞き、お伝えさせていただきたいものです。

願わくば、この南無阿弥陀仏の心が、平等に一切の人々に伝わり、同じ菩提心をおこし、もろともみ仏となり、世を照らす灯火とならんことを

(神戸市、信行寺住職)